

2004年10月23日(土) 港区  
 の弁天町オーク200アトリウム  
 広場で開催された、大阪国際交流セ  
 ンター(大阪国際学校主催のインタ  
 ーナショナルスクール フード&  
 エンターテイメントフェスティバ  
 ルに参加しました。

会場にはインド、韓国、台湾、タ  
 イなどの各国の屋台が並び、国際  
 色豊かな楽しい雰囲気でした。市岡  
 国際教育協会のブースで、日本語教  
 室のチラシを置きPRしました。

ステージには市岡ハーモニーバ  
 ンドが出演、学習者のサンディアさ  
 ん(スリランカ)の明るい司会で、  
 ラムさん(ネパール)の笛、佐竹さ  
 んの太鼓演奏、サイハンチムグさん  
 ナランフさん(内モンゴル)姉妹の  
 美しい歌声に会場は拍手と笑顔で  
 いっぱいでした。

演奏が終わり、ナランフさんとサ  
 ンディアさんのミニ外国文化の紹  
 介、ステージにYMCA国際学校の生  
 徒が上がり、ステージ前席にも生徒  
 達が集まりスリランカや内モンゴ  
 ルの話聞き小さな教室になりました。  
 質問したり質問されたり対話  
 形式で進み、生徒に分かるように優  
 しく紹介し、会場は楽しい国際交流  
 の一日でした。

昨年度まで市岡で学習されていた台湾の黄さんから、新年早々うれしい便りが届きました

「皆さん、ご無沙汰です!!!早いですね!もう2005年になっちゃいました。

とても遅かったですが、あけましておめでとうございます。皆さんはもう仕事についていると思いますが、お正月はいかがでしたか?遊びに行きましたか?それとも、ゆっくりしましたか?年明けや新年にいい事を聞いたら、よい一年を過ごせるとは言いませんか?

私はその言葉を信じていますので、いいことを皆さんに伝えます。皆さんはこれを聞いてよい一年を過ごせますように!

実は、去年の11月末、私はツアーコンダクターの試験をうけ、見事合格しました!

私は運がいいから、それで受かったと思いましたが、よくみたら、なんと合格率は15%で、しかも私の成績は上位にありました。

本当にびっくりしましたよ!また、両親にも喜んでもらってうれしかったです。

ちなみに、私は大阪にいけるかもしれません。

私は母に大阪に帰ってみたいなあ!と前からずっと言ってきて、試験に合格した時にまた言い出したら、母がやっとOKを出してくれました。

まあ、ご褒美と言えますかね。時期は、2月の中旬(旧正月が終わってから)ぐらいで、どれくらいかはまだわかりませんが、もちろんできればなるべく長くたいです。」

黄さん、難関の試験を見事突破されたとのことで、本当におめでとうございます。

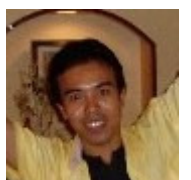
大阪へ遊びに来たときには、是非市岡へ顔を出してくださいね。

前回27号の「学習者の声」のコーナーでご紹介した

**RISLAN USMAN**さん

12月に4班のメンバーを中心に送別会を開きました。

1月にはインドネシアに帰国されました。今後のご活躍を期待したいと思います



**ボランティアリレーエッセイ第16回**

『未知との遭遇』---異文化に対する好奇心---

9班 根沢 知之

子供の頃に訪れた万博で、生まれて初めて外国人の姿を目にした。見上げるような背丈に、金髪で青い目。今まで見たことのない容姿にびっくりした。さらに驚いたことには、今まで耳にしたことのない言葉で外国人が話をしていた。どうして外見や言葉が違うのだろう。映画『未知との遭遇』で人間が異星人と接触する場面に、自分も居合わせたかのような緊張と興奮で、手のひらが汗でにじんだ。太陽の塔を見たときの感動的なシーンは、もうすでにどこかへ吹き飛んでいた。この『未知との遭遇』で培った異文化への関心は、その後の人生において強いバネとなった。万博で見た外国人の話す言葉は私にはわからなかったのに、なぜ外国人にはわかったのか。時間を経て異国文化理解に対する好奇心は薄れることはなく、それどころか強まる一方であった。幸いにも、学生時代のアメリカ交換留学及び、就職後のオーストラリア勤務を通して、日本と両国の習慣・文化・生活様式の違いを学び、異文化理解をさらに深めることができた。

『未知との遭遇』に端を発した異文化に対する好奇心は、今も私に人生の水路を明確に示してくれる心強い漣標である。毎週金曜日の夜、あわただしい就業後にもかかわらず、日本語を学ぼうと闘志を燃やしてやってくる外国人学習者の出身地域や文化圏は様々である。同時に、自分たちの母国語や文化を外国人学習者に理解してもらい交流を楽しもうと、時間をやりくりして集まってくる日本人ボランティアの年代も幅広く、経歴も多種多様である。

私たちの交わりと活動の場である市岡夜間高校は、一瞬にして活気あふれた地球村となる。人種や言語の壁を乗り越え、何ら臆することなく互いに気持ちを伝え合い、相手の文化を尊重し、互いに心から理解し合えるようになれば、私たちの生活の場である地球全体はどんなに住みよく、素晴らしくなるだろうか。その実践舞台である市岡日本語教室に入団し、早くも2年の歳月が経とうとしている。しかし、この『未知との遭遇』という舞台に終幕はないのである。